服飾造形における技術的研究（第１報）

――フォーマルドレスの製作――

山　本　　政、増　田　純　子

Ⅰ．緒　　論

社会の高度化とともに被服文化の発達も、また、目覚ましいことは周知の通りである。新たに、現代服創造への歴史を振り返るにあたって、その視点を服装・感覚・文化の相互関係から子細に考察すると、着るものの変化が人々の生活や感覚を変え、その時代を変えている現象が見られ、衣服が食・住にもまして社会生活を帯びている事象に遭遇する。そのような角度で現代の服装を捕らえると、唯彼問わず、実用的・美的・シンボル的な面において、それぞれの機能を享受しているといっても過言ではなかろう。こうした服装社会の中で、保健衛生面などの実用的機能や、感覚中心の美的機能は、構成面であまり制約がない。しかし、シンボル的機能は礼節面で、被服構成上の関わりを持っている。例えば被服形態の大小や長短、あるいは着装方法の如何で、服装の機能が大きく変化するからである。そこで、衣服を着脱せずに服装を変え、実用的機能と礼節機能の両機能性を融合できるデザインを設定した。素材もまた、箪笥に眠っている和服をリフォームすることで、更なる合理性を追求しようとしたものである。

Ⅱ．研究方法

１）資　　料

袷羽織の表を使用する。布地は紋綸子縮緬の滝紋（柳絞）で着尺地である。古人が愛用したことや箪笥にしまいっぱなしであったために、肩の陽やけと色あせ部分が多い。これらを考慮し和服で使用した裏を、洋服の表として縫製した。写真１が示すように、残り布も含め残らず使用した。

２）布地の点検

和服地は通常36cm幅（並幅）であり、長さ約12m（１反）の反物である。その幅を、洋服

地の中で最も狭いものと比較すると、約半分の幅である。その上羽織として裁ってあるために、長さにも制限がある。そこで素材とデザインと製図の適格な整合性が必要となる。そのため次のような点に留意した。

(1) 袷羽織の形態と柄行

紋様が柳絞りの総柄であり、デザインについてはシャープな縦縞より、柔軟に対応できる柄ゆきである。

(2) 用尺の把握

写真1は羽織をほどいた着尺地の総てである。余り布も含め撮影したものであり、用尺の多いことがうかがえる。なお羽織は用尺の多い場合に図1のようなバランスで胴裏を配してあるのが通常である。本材料の羽織も着尺の多い仕立ての場合の胴裏使用である。しかし、着丈が短いことから写真2ではその事を見取りにくい。他方、裁断の特徴や縫製における工夫が見られる所から、次回長着にリフォームする為の製作方法であることが理解できる。そのことは、洋服をデザインする場合の余裕として推測される。それらの事象のうち、特に身頃布でゆとりが多いことがわかる。それは前・後身丈の引き返し分が多いことに加えて、前

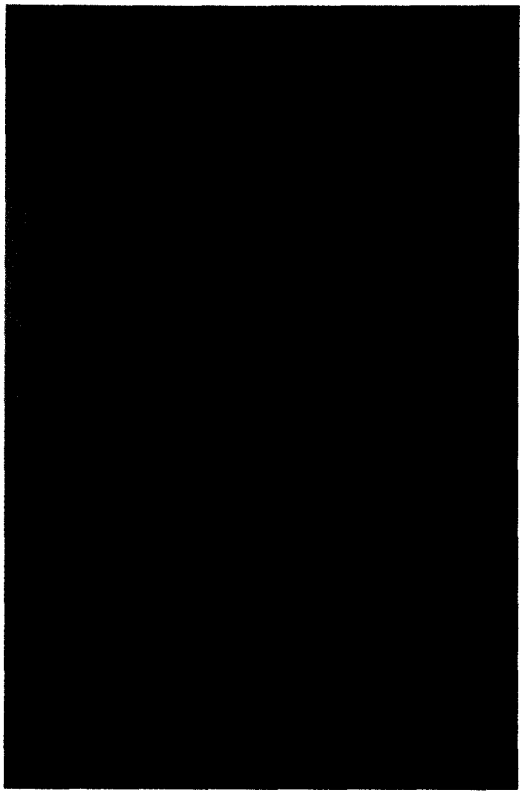

写真1 袷羽織をほどいた表布

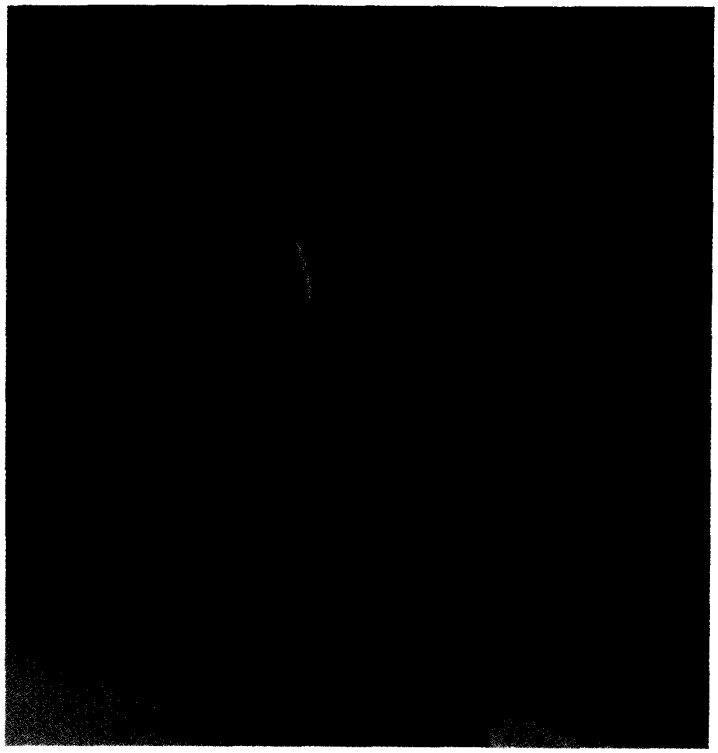

写真2 元の羽織と残り布

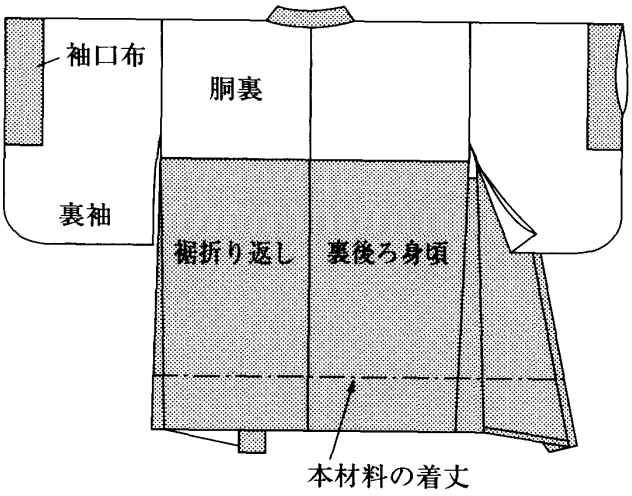

図１　用尺の多い場合の構成図

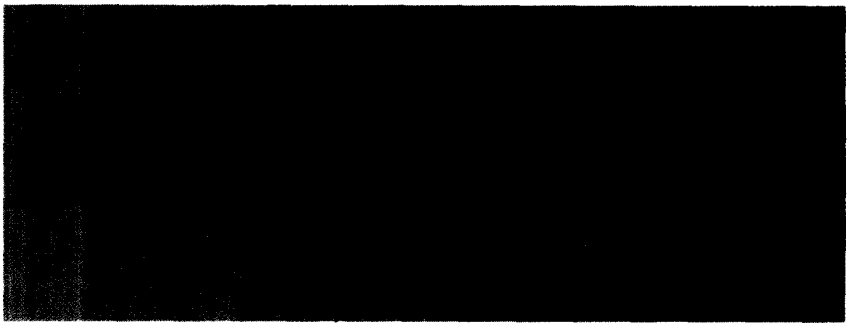

写真３

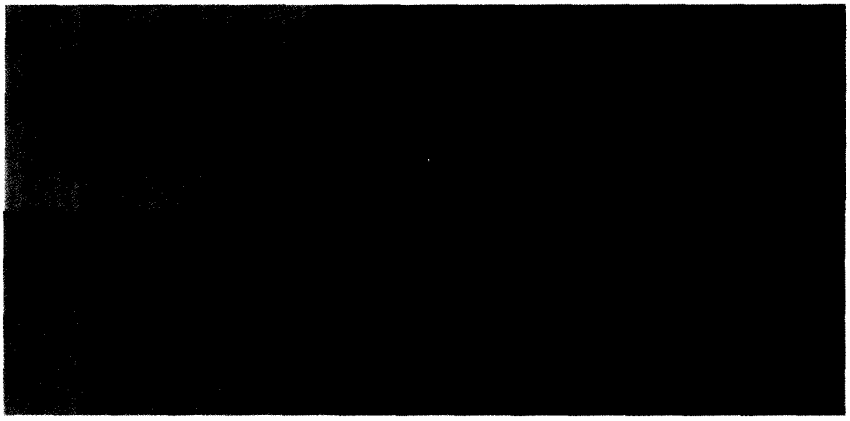

写真４

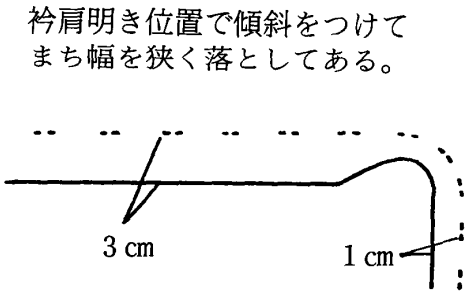

図2 前身頃 衿肩明き 裁断図(一部分)

身頃を広く裁断してあることであり、写真3に示す通りである。その詳細は衿肩明きの3～4cm下から裁ち切り身幅を広くしてある。そのことは長着にリフォームすることの証左でもある。図2に示した拡大図の通り、裁ち切り襠幅が最小限度に押さえられ裁断されていることが推測できる。また長着にした場合の衽、衿、掛衿を取るための配慮として、衿丈を出来るだけ長く裁断してあり、襠丈も表布の総引き返しになっている。それらは写真4が示す通りであり、その詳細な測定値は図3に示す通りである。

3) デザイン設定

布地を点検し確認したデータを基に、着脱せずにアフタヌーン・ドレスから、ロング・ドレスに早変わりするフォーマルなワンピース・ドレスを設定した。デザインのポイントはロング丈からノーマル丈にする工夫であり、その位置にアクセントを置くような表現にした。その方法は、前・後身頃に入れたプリンセスラインの切替えを利用して、ローウエスト位置に紐通し穴を明け、ベルト風の共布の紐を、見え隠れするように通し、この幅広の紐でドレス丈の長・短を調節することにした。

4) 製図と仮縫製

(1) 製 図

全体的なシルエットから、採寸部位やゆとり寸法の設定がむずかしい。またロング丈とノーマル丈着装時のボトムのシルエットがそれぞれ異なり、かつ布地の表現性も通常とは非常に違っている。布地は比較的厚地の絞りであるため、エレガンスな優雅さと、重量感を持ち合わせているからである。着装効果をイメージし、重量感や硬軟感から外観表現をすると布地に腰と張りがある。これらを踏まえ図4に示す通り製図展開をした。

(2) 仮 縫 製

実際に使用する布地の用尺が限られているため、効果的な裁断が必要となる。そこで量産

システムによる裁断を応用し、着用者の寸法でスローパーを作成した。90cm幅のシーチングを3.6m使用し仮縫製を行ない、マスターパターンを求めた。試着後の補正はS.N.P（衿刳）あたりとセミラグランのラインを、わずかに修正した。特に焦点を当て検討したのは、ドレスのアクセントになるベルト風の紐の位置および、紐の見え隠れするための穴分割位置の調和であり、前面、側面、後面でそれぞれ２～３パターン変えて観察した後、写真５のように決定した。

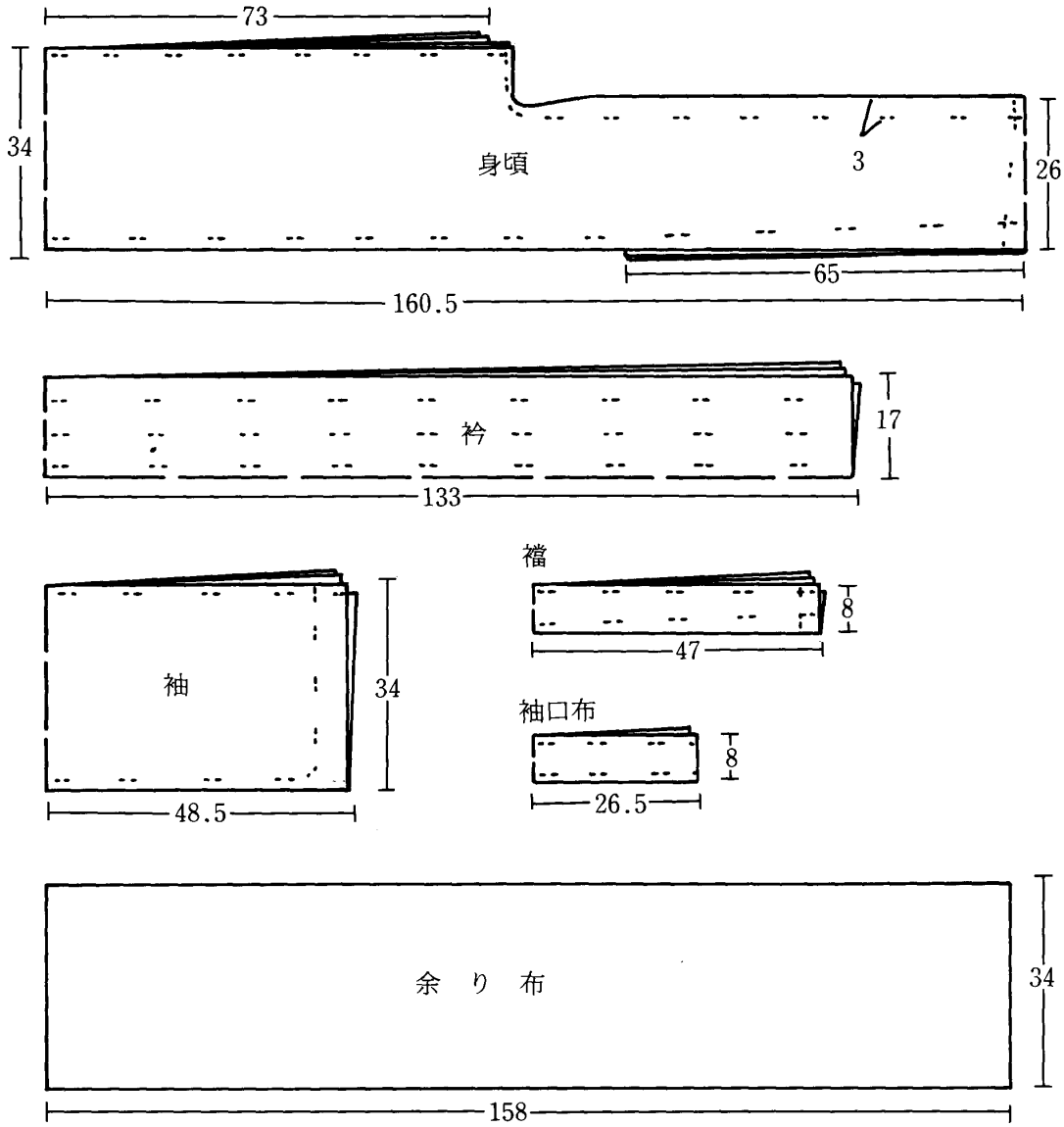

図３　測定値（単位cm）

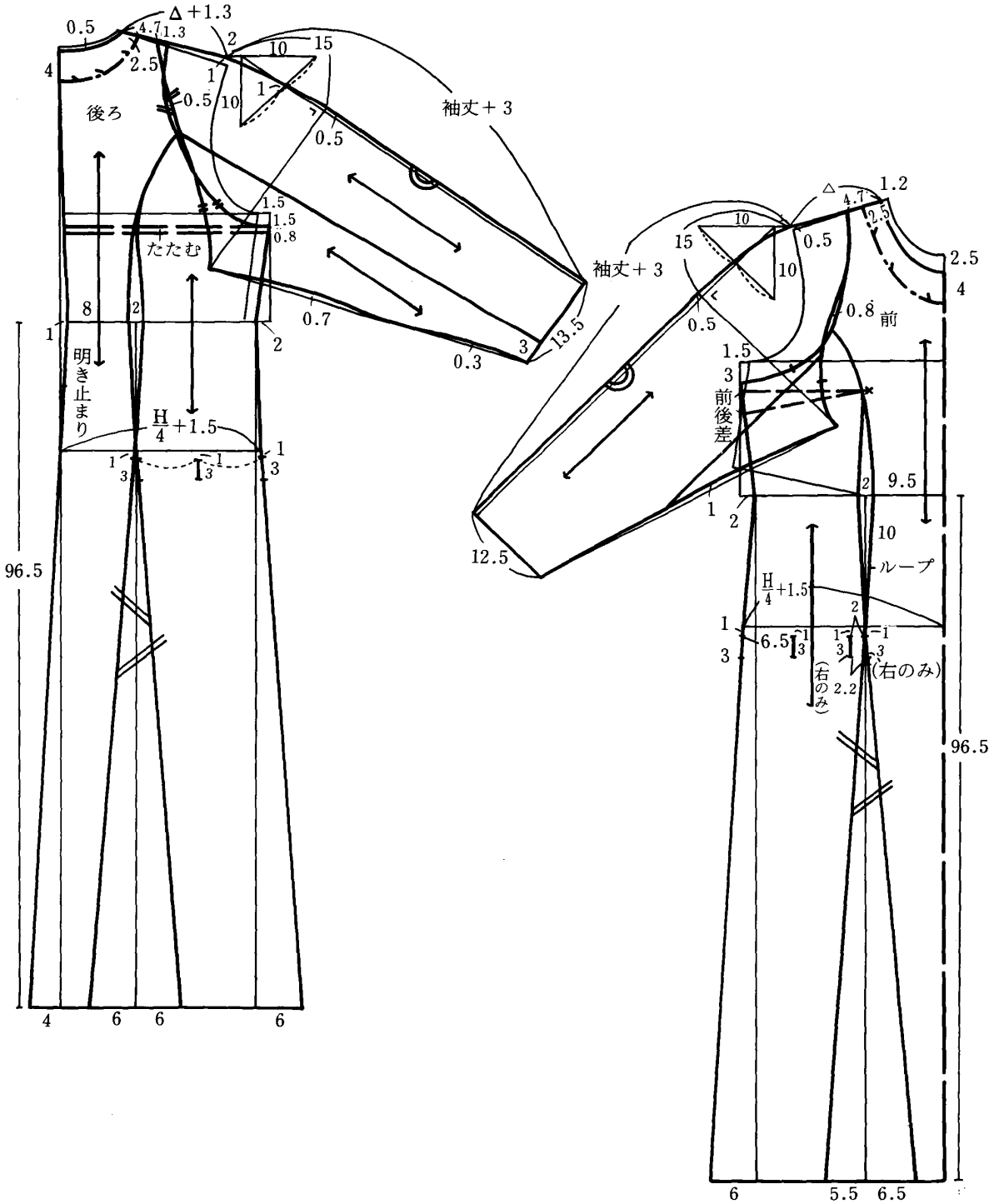

図4 ロングドレスの製図

5）本 縫 製

(1) 裁　　断

マスターパターンによるマーキングを行った。写真６に示すような型紙配置であり、その詳細は図５－１に示す通りである。裁断上工夫を要した所は、①袖。袖のデザインがラグラン袖のため、二の腕辺りの袖幅が太めになる。そこで、袖山の位置を後ろ袖側に移動し、二枚袖の外袖感覚の表現にし、内袖側の前腋点位の見えない所で、少し接ぎを入れた。図５－２に示す通りである。②身頃。前身頃のプリンセスラインの位置を、グレーディングし蹴回し寸法を確保した。（前中心の裾幅マイナス0.6cmとし前脇布の裾幅プラス0.6cmとした）図５－３がその方法である。

(2) 仮 縫 い

布地が厚く糸密度も大であり針通りが悪いため、仮縫い合わせは押さえじつけのみにした。試着の結果マスターパターンの補正はなかった。なお、写真７で示すようにボトムをおはしょり風に引き上げて、W.Lのギャザー分量やH.Lのゆとり関係、アフタヌーンとして着用する際のスカート丈などの検討を行った。

(3) 縫　　製

- ロングドレスとして着用する際に、紐を結んだ位置を装飾的にし、アクセントをつけるためには位置関係が大事である。そこで写真８に示すようにループボタンホールをつけ固定することで、合理的な着装ができる工夫を行った。
- 羽織を仕立てた際の残り布で、後ろ身頃の脇布を裁断したが布が少々残った。幸い反物の端に絞り染色の無地があったため、これを最大限に活用し他の裁ち出し布も集めて葉っぱのついたコサージュを作成した。写真９－１、２、３の示す通りである。
- アフタヌーンとして装う場合、紐で引き上げた位置を格好良く整えるため、共布で作成するベルト幅を広くしたことと、またロングドレスとして装う場合のベルト風の紐の長さが多く必要なことから、かなりの用尺がいる。その裁断布は図５－１に示すように左右両襠と、袖口布２枚を使用したが、不足分を余儀無くし、写真10に示すようなわずかな裁ち出し布も用いて縫製し苦慮した。しかし、パーツによってはグレーディングにより算出された布幅と丈により、マーキングができたことで、着装して継ぎ目の見えないように製作できた。なお紐の通し位置は図６に示すとおりである。
- ミシン機種は家庭用ポータブルミシンとロックミシンを使用しミシン針11番、ミシン糸は表地を絹の50番、裏地はシャッペスパンの60番を使用し縫製を行った。
- 保型性面の芯据えは極く丁寧に行った。芯布を入れ縫製した部位は見返しと、ベルトであ

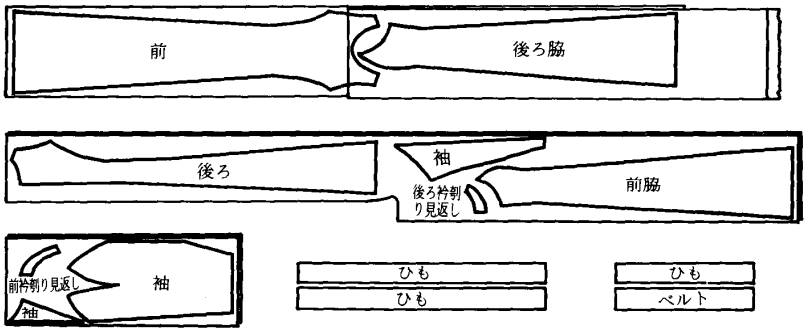

図5-1 裁ち合わせ図(縫い代なし)

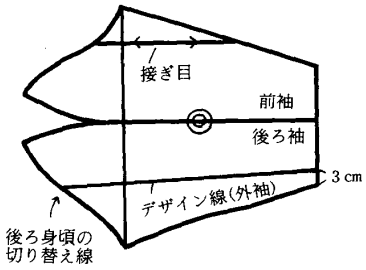

図5-2 袖裁断詳細図

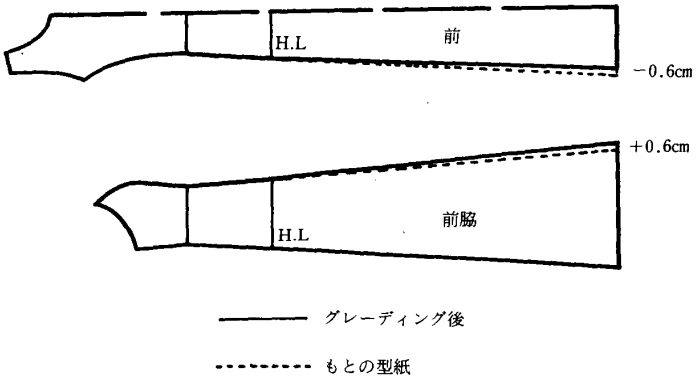

図5-3 グレーディング

前 面　　右側面　　後 面

写真5

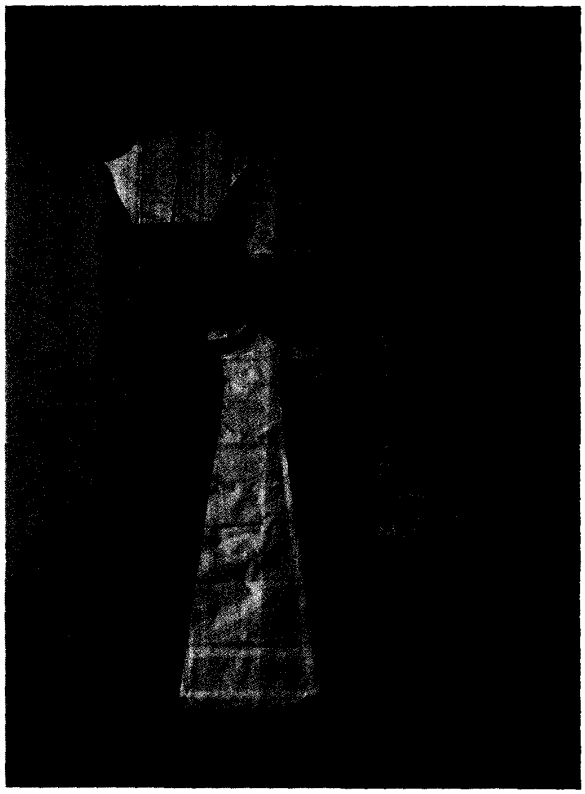

写真６

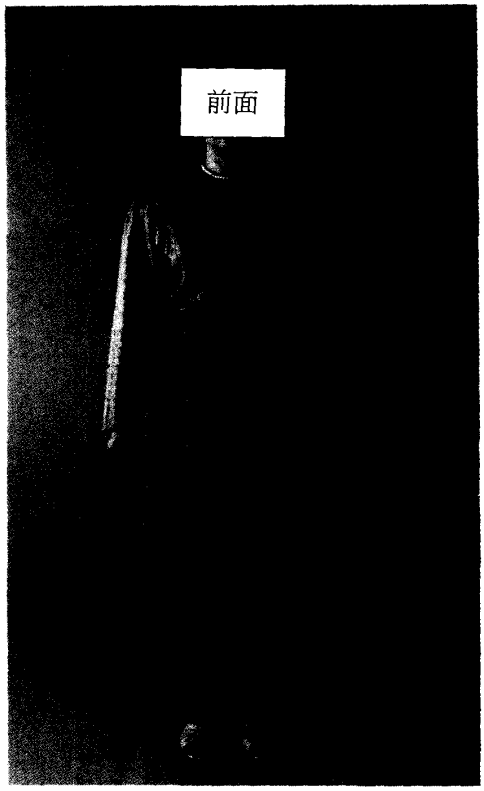

写真７

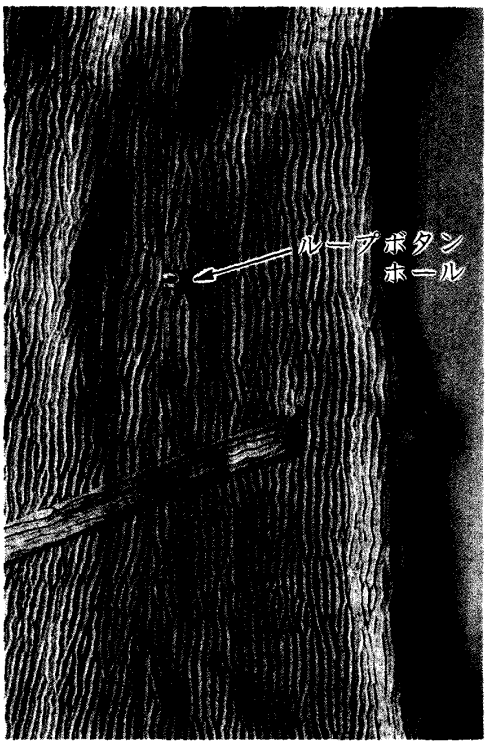

写真８

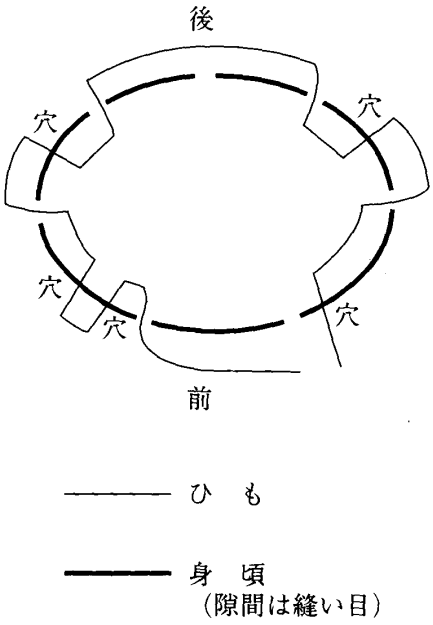

図６　紐通しの断面図

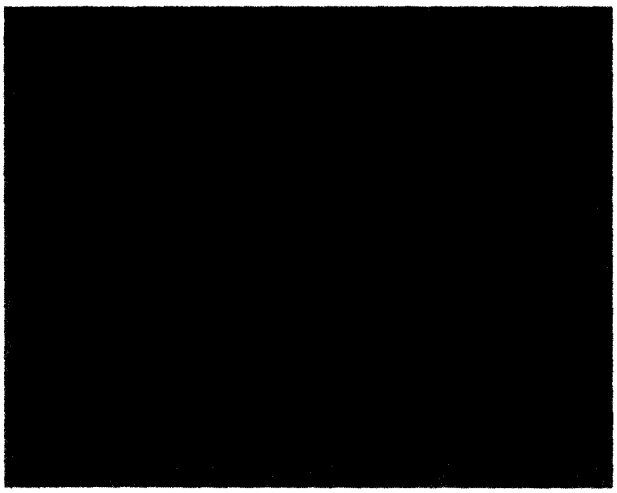

写真9-1

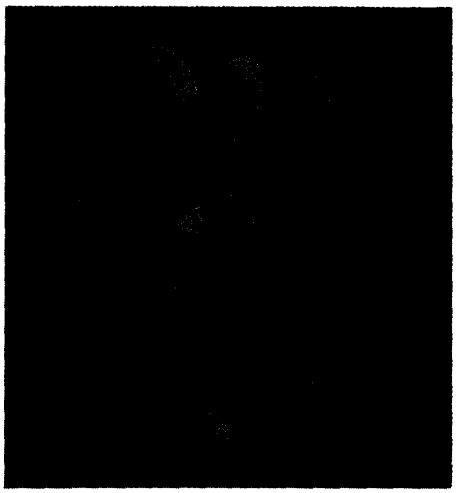

写真9-2

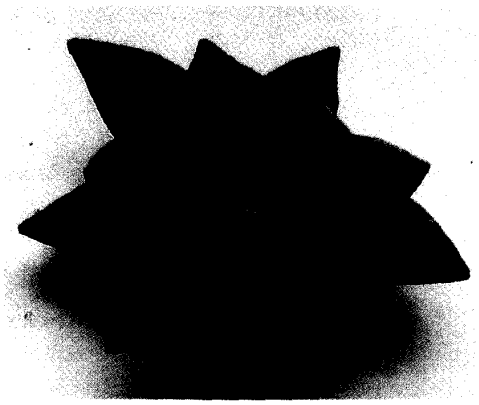

写真9-3

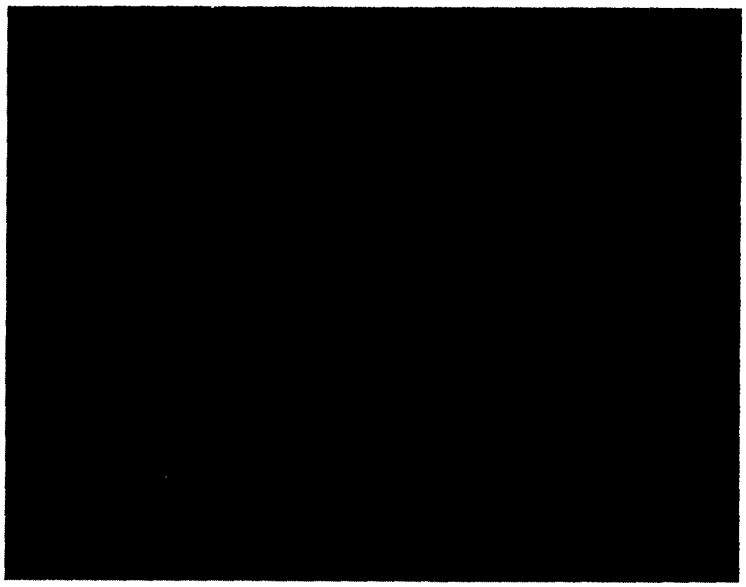

写真10

り粒子状の接着芯を貼った。ベルトには既製のベルト用接着芯を、見返しにはアピコAM60を使い分け使用した。生地の厚さや張り、また絞り染めの風合いなど、テクスチュア面の、イメージをこわさないで、造形効果の上がるように考慮した。

Ⅲ. 考察と結果

(1) デザインについて

●今回のフォーマル・ドレスの製作は、和服地の絞りから洋服にリフォームするものであり、マテリアルの表現性が最大の研究課題であった。そこで縫製面における補助効果として、構成や保型性効果を上げることを念頭におき作業を進めた。その結果副素材との相互関連

から合理的に質の高いものになったと思われる。

●仮縫製とドレス布の材質は、絹と木綿という一口には大変異なるイメージである。しかし、両者の布地を比較して、硬軟感（腰と張り）から、推察すると同様の造形効果を持つ素材と思われる。そこで、敢えて厚手シーチングによる仮縫製を行った。これで採取したマスターパターンは、そのままドレスの裁断に活用したが、本製作の仮縫い試着において補正はなかった。写真11の通りであり、予想したように紋綸子縮緬の方が少しスマートなように思う。従来これらの布地に対するイメージ特性の比較データはない。しかし、本製作のドレスのシルエットから表現性について観察すると、感覚的、イメージ的なものは解明できたといえる。

●素材とデザインにおける造形効果・外観効果・着装効果の相互関連から検討を加えると次の通りである。

① ロングドレスのシルエット面では

布地の硬軟感、重量感に適合したデザインであったと言える。そのことは、布の剛軟度とドレスのロングという因果関係において、ロングドレスの場合フレアー濃度が深くなりプロポーションの欠点をカバー出来たように思う。写真12がそれである。

② アフタヌーン・ドレスのシルエット面では

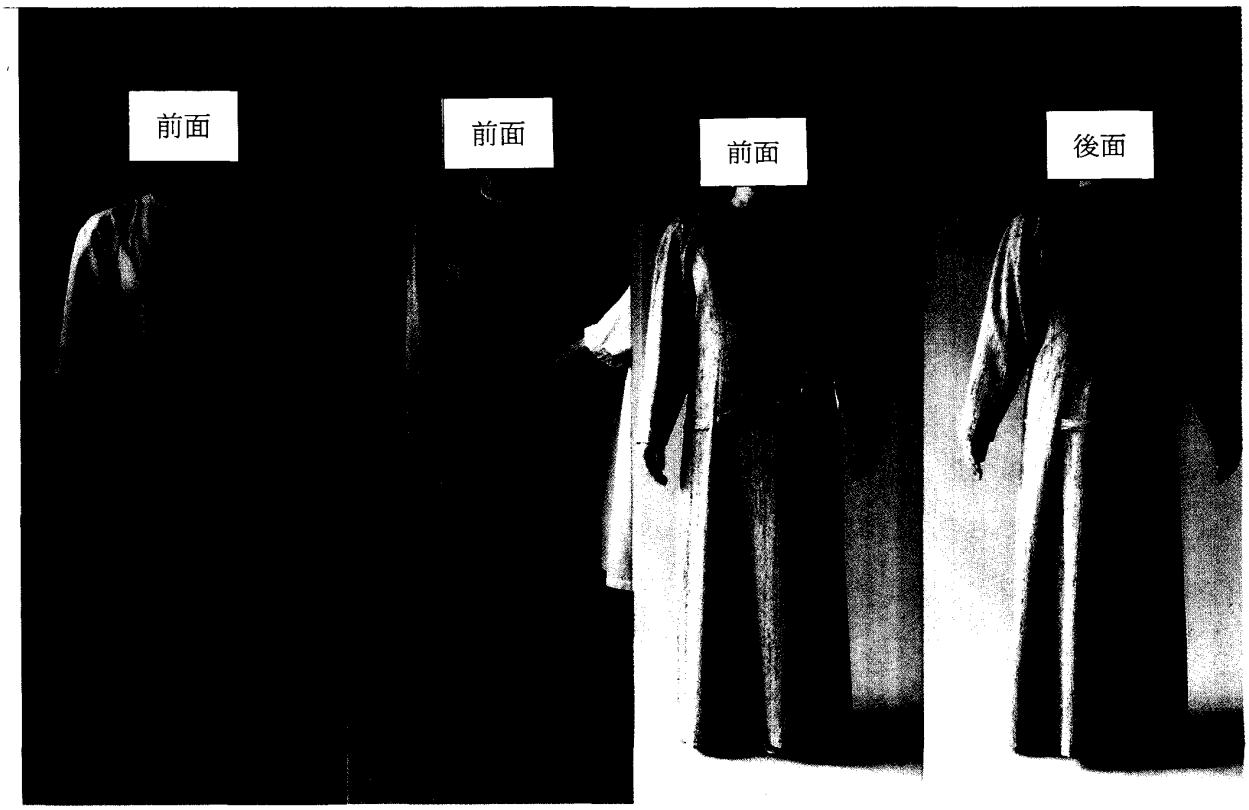

写真11　　写真12

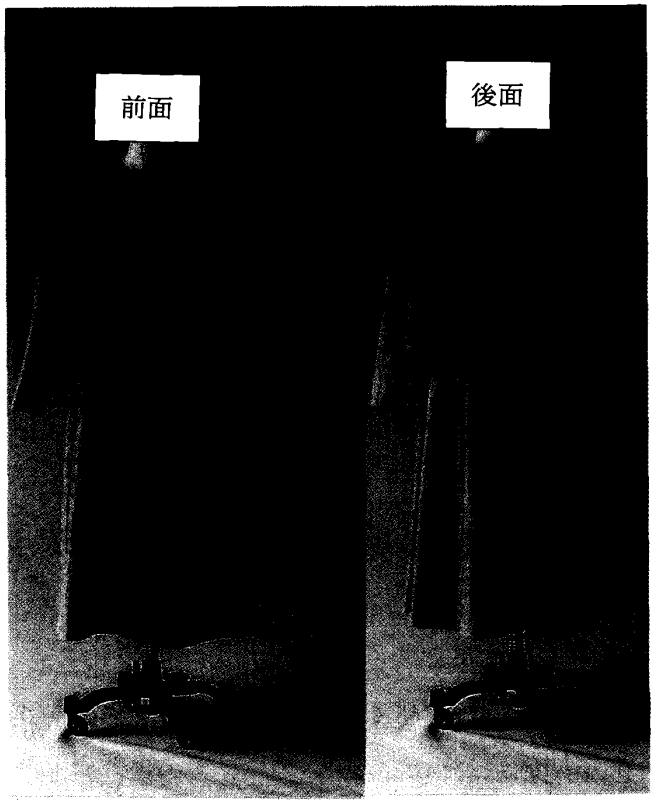

写真13

ロングドレスをH.L当りまで引き上げて、新しいW.Lをギャザーとして処理し、アフタヌーン・ドレスで着装できる。着脱せずに早変わりし服種の違った装いになることは、機能面ではまさに合理的である。しかし、デザイン線がプリンセスラインのため、布地の腰と張りが重なって、洋服の新しいH.Lはボディとの空間を大にして膨らみを持つ。ドレープ性も小さくなることから、ロングドレス着装時と異なり、身体のフィット性が悪くなる。写真13がその着装である。

(2) 素材について

本来この羽織の表は、朱子地の部分が多く、厚地の割合いには表地の風合いは滑らかであり、ドレッシーである。しかし、写真1で示すように色あせ部分が多く、裏を用いて製作したために、洋服の表は朱子地特有の光沢がさえぎられ、また絞りの凹凸も少なく、表現面では多少ラフな感じとなった。

(3) 縫製について

●ドレス丈の長・短を自由にするため、おはしょり感覚のベルト位置と、ベルト風の紐は、本デザインで意図したフォルムの性格を表現できたと思う。

●袖をセミラグラン・スリーブとし、肩を明示しない袖にしたことは、ボディーの変化にも対応できる機能形態と言える。

●芯の扱いで、接着芯を使用したことと、本来の絞り表面に接着することが重なって、柳絞りの凹凸状が大きくなるため、接着強度が大である。そこでバキュームアイロンを使用したため、絞り特有の立体感に少々支障をきたした。

Ⅳ．要　　約

本研究の材料は通常の一反を使用した羽織である。これを残らず使用してフォーマル・ドレスを製作した訳であるが、反物その物の広さが幅いっぱいに使っても洋服地の半分に過ぎない。その上今回の材料は絞り特有の布幅で通常の並幅より狭い。また一度裁ってあるため反物の長さと幅が名称別に区分され、それぞれ寸法が異なる。そこで材料に合わせてデザインを考え、製図展開をするわずらわしさがあった。また和服は年齢や身長に応じ、あるいは好みや用途などに左右され、着丈や袖丈が短く裁断されていることが多い。使用の羽織も着丈、袖丈共に短い。これらの諸種の理由から、和服を洋服に再生して、身体のフォルムとしての美しさとデザイン、および素材の調和が如何に表現されるかが製作上の難所であった。しかし製作結果から、こうした諸種のことへの対応ができたと思う。和服をリフォームする時の基礎知識として、和服の構成を会得していれば、洋服にリフォームする構想やデザインの案出も比較的容易である。高級感のある和服地を使用して、和服のイメージを捨てた、新鮮味のある洋服に変えられることを理解した。そして素材の有効活用と共に、造形上の技法を研明した。経済性を軸に、機能性、合理性の追求を意図した研究が、今後の着用実験によって実証できると思われる。

本研究の製作物は平成８年５月、日本服飾学会において展示発表したものである。

山　本　　政（本学教授）
増　田　純　子（本学助手補）